「食品ロボ」個性が進化

国際食品工業展開幕

数秒で一口大カット ■ 衛生配慮 洗いやすく

食品工場で「働く」ロボットや機械を展示する「国際食品工業展」が7日、東京ビッグサイト（東京都江東区）で開幕した。野菜や果物を切り分けたり、選別したりする機能に磨きをかけたロボットが目立った。

石川県の馬場鉄工所などは、ジャガイモの芽を取り除くことができるロボットを出展した1。ロボットアームがジャガイモをつかみ、レーザーとカメラをつかって芽の位置を特定、カッターで取り除く。人手不足に備え、機械化のニーズは高いとみた。馬場博邦事業部次長は「ロボットなら24時間働けるようになる」と太鼓判を押す。

北海道芽室町のフクザワ・オーダー農機が開発したのは、ブロッコリーのカット機2。機械にブロッコリーをセットしてボタンを押すと、カッターが回り、数秒で一口サイズに切り分ける。同社は農家向けに開発したが、「冷凍食品工場や外食店のセントラルキッチンからの引き合いが多い」（福沢剛志代表）。

長野県上田市のジェー・ピー・イーは、特産のアンズやプルーンの種取り機を展示した。人手のかかる種取り作業を機械でしたいとの声がよせられ、3年半かけて開発したという。

大手も食品工場向けの機械に力を入れる。産業用ロボット大手のファナックは、キャベツをセンサーで計量してS、M、Lとサイズごとに分ける選別ロボットを展示3。衛生面に配慮して、ロボットのコード類を内部に収納し、ロボットを洗いやすくしている。

東京都練馬区のすし製造ロボット大手の鈴茂器工は、好みの量のご飯をどんぶりに入れられる「シャリ弁ロボ」を出展4。4月に改良し、保温機能を強化したという。大手牛丼チェーンで採用が広がっているが、「ファミリーレストランなどにも売り込みたい」（担当者）という。

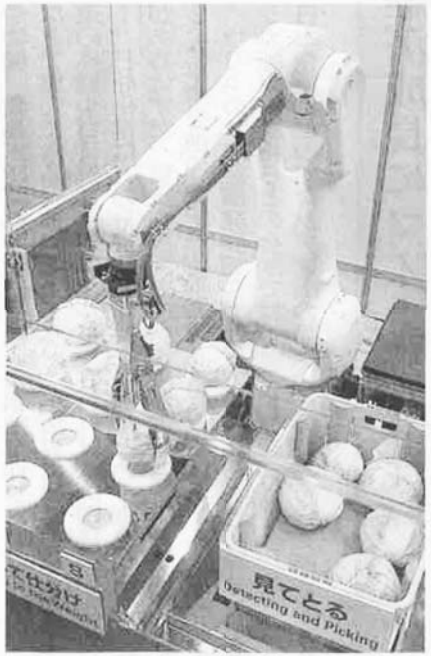
国際食品工業展は10日まで。686社が出展する。（南日慶子）

デジタル版に動画

1 馬場鉄工所などが出展したジャガイモの「芽取りロボット」。1個30秒ほどで芽がとれる

2 フクザワ・オーダー農機のブロッコリーのカット機。もとは農業機械メーカーだが、農家の依頼で食品加工機をつくったという

4 鈴茂器工のシャリ弁ロボ。ご飯をほぐしながら器に盛って、牛丼のタレをしみこみやすくしているという



3 キャベツをサイズごとに分けるファナックの白いロボット